第八回三池にまなぶ婦人集会

全国から89人の参加

暖い交流通じ学び合う

第八回三池にまなぶ婦人集会はさいわい天候にめぐまれ、六月二十八日から三十日まで二泊三日、現地三池で開催されました。そして、闘う三池労組と主婦会に対する暖い連帯の手がさしのべられました。心からの感謝を述べさせていただきます。（この項主婦会からの寄稿）

三池に学ぶ婦人集会には、先の衆参両院議員選挙闘争のぬくもりを抱えつつ、全国三十一都道府県から、七人もの乳幼児を抱えた婦人たちを含め、八十九人の婦人が集まりました。

参加者が手にしていた〝交流のシオリ〟に、合志・三池労組組合長は「この交流も今年で八回を数えましたが、こんなにも長く続くことができましたのは、何はさておき、三池の闘いの火を身をもって全国に広げていった、数多くの仲間たちがいたればこそで、心からの敬意と感謝を呈したいと思います」、と述べられています。事実このような交流はきわめてめずらしく、ほかに例を見ることができません。そこに、年ごとに重要性を増していくわが国の労働運動と同時に、発展する婦人解放運動の歩みを見る思いがします。

大切にしたい参加者たち

二日目の全体集会では、三池主婦会の歴史と現状が、「主婦会結成のこと」（織田フミエさん）、「三池闘争の時」（池田ヒデさん）、「CO闘争を闘って」（斉藤清子さん）となまなましい体験を通じて報告され、あと宿泊先の交流ではまた、各地域ごとに夜遅くまで交流が続きました。三川指導部の大正分会から、次のような感想が寄せられました。

「昨年までは他の分会から応援を得ながら交流してきましたが、今年は集団分会から転入された仲間や、西浜田分会からの参加を得て、自力で交流会ができたのが何よりうれしかったです。主婦会結成の苦労や喜こび、またCO患者家族の方より現状を語っていただき、私たち自身の勉強にもなり、たすかりました」

幼ない子どもづれの方を受け入れたところからは、「遠路、小さな子どもをつれての参加は大変だったろう。今私たちに、そんな勇気と行動力があるだろうか。来てくださる人には感謝して、大切にしなければいけませんね」

あせらずに仲間づくりへ

参加された婦人の方は、また次のようなことを述べて、帰っていかれました。

「この三日間の話し合いのなかから、何よりも命を大切にし、労働者あっての社会だ、との自信が闘いの歴史のなかからつかまれたのだ、ということを知りました。これからはあせらず、職場で仲間づくりを中心に取り組み、学習会を組織していきたい」

東ドイツの婦人も参加

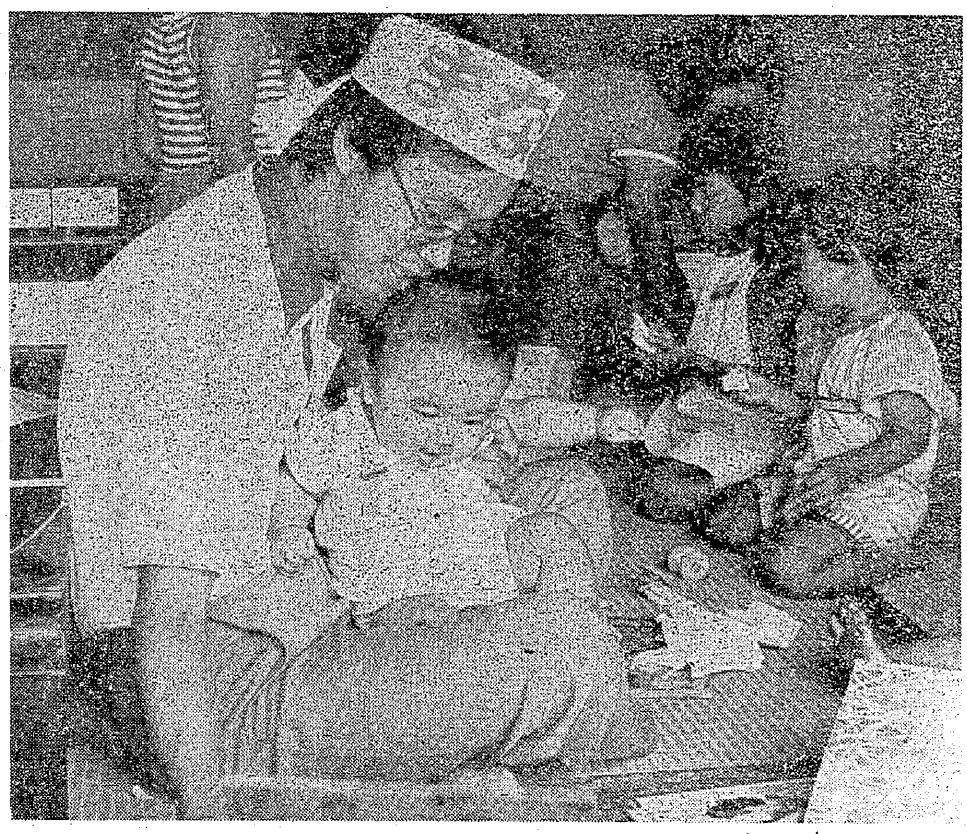
閉会集会では、ドイツ民主共和国（東ドイツ）の婦人二人――イレーネ・ミュンヒ＝DDR代理大使夫人、マリアンネ・ケーリー国営旅行社日本支店代表夫人が出席しました。イレーネ・ミュンヒさんから、国際連帯を深める暖いあいさつをいただき、参加者からいろんな形で、三池の命を守るCO闘争に大きな厚意が寄せられたことを報告し、感謝の意を表明してこの項を終ります。

× ×

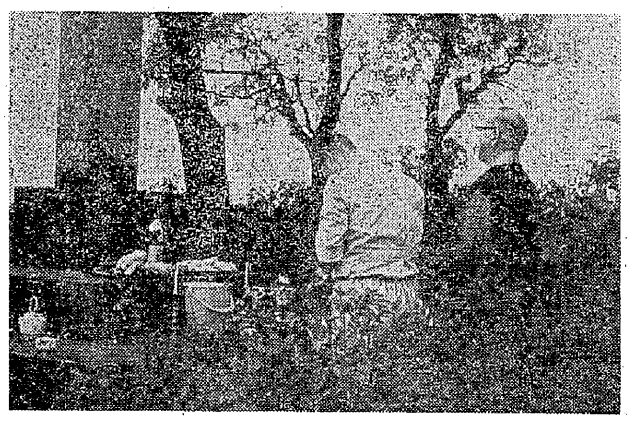
なお、会社は供養に対してきわめて冷たく、線香代だけですませているのだそうです。

× ×

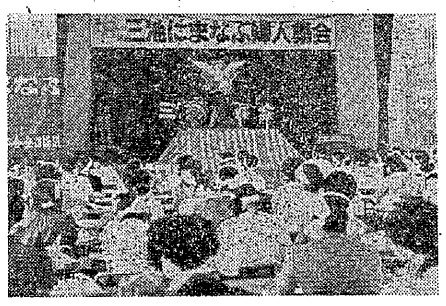
きたる八月十日午前十時から、大牟田囚人墓地保存会（浦川守代表）は、久保田町の蓮心寺で第十二回「死没囚人労働者法要」を営むことにしています。一般の焼香を期待しています。



三池にまなぶ婦人集会では、にわかづくりの託児所が開設された。婦人に心ゆくまで学習してもらうためで、これはほほえましいそのひとこま。



大砂社宅の裏山の頂に立つ〝解脱塔〟の前で、おごそかに墓前供養。囚人労働者たちほ、三池集治監だけで3千人以上も死んだことが推定されるものの、三潴福岡、熊本、長崎、佐賀など各県から出役してきた囚人労働者の死者数は、ほとんどわかつていない。



終りの総括集会

囚人墓地で供養会

14日大砂地域組織が

三池炭鉱の、大砂社宅の裏の丘の頂に立つ〝解脱塔〟で、土地の人たちがちょっと耕して畑にすると人骨がごろがって出たといいます。

同墓地では、毎年三池労組と新労働者が絶対に忘れることのできないのが、多くの囚人が労働者として坑内の採炭切羽などに投入されていた事実です。

三池資本は、明治―大正―昭和の三代をつらぬいて、囚人を強制的に炭鉱に酷使してきました。それで災害などで囚人労働者が死亡すると、火葬もせずに山のなかに埋め、その骨を井戸のなかに投げこんで棄てたりしたといいます。その一つの墓が、新勝立町一丁目の今日の発展を築いた者で、私たち三池炭鉱労組の地域分会が交互に供養を営んできました。二十数年になるのだそうです。

この十四日、三池労組の大砂地域（責任者＝弥永善治さん）は午前八時から〝解脱塔〟の前で、大牟田仏教会と三池主婦会の同地域分会の援助により、供養を営みました。小雨降るなか、たくさんの人びとがおまいりし、故人たちの冥福を祈りました。

恵まれた環境とまではいえないまでも、当時に比べるとはるかに自由な社会で働くことのできる者として、昔日の故人たちの悲惨だった姿をしのび、せめてもの供養を営むことは一つの義務ではないかと思います。

緑ケ丘暁町で真昼間火事が

十一日昼過ぎのこと、荒尾市緑ケ丘社宅暁町四棟で火事が発生した。消防がさっそくかけつけ消火につとめたが、梅雨空のもと、ときおり小雨も降るなかでも火勢がなかなか衰えなかったものと見えて、かけつけたときは丸焼けとなり、骸骨のような家屋の骨格だけが影をとどめていた。

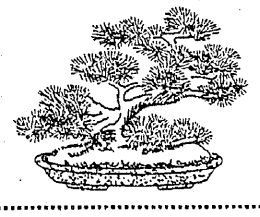
聞けば、留守中のこととかで家財道具いっさい焼失してしまったとのこと。

木造平家建（八十五平方メートル）の鉱員社宅で、住む人は岡村博美さんといい、三池三川鉱人事に勤務している人とのこと。思わぬ災難に会った岡村さんのことを近所に住む人びとは心を痛めていた。

「とにかく雑草はぼうぼうと生え、この環境自身が危いですよ」と、今後の心配を語る人もいた。

梅雨明け以後の花ものの手入れ

芸園



観葉植物の管理

熱帯・亜熱帯地方がふるさとの観葉植物にとって、わが世の季節。管理を間違えないように。植物にとって光合成は欠かせられないものですが、急に日光に当てると葉焼けを起こす。だから、徐々にならすようにする。でも、日光が不足すると花色や葉色はあせ、また花芽がつかなくなります。

日光に当てた方がよいものは、サンスベリヤ、ゴムノキ、デンドロビューム、ベコニア、センパフローレンス、サボテン、フエニックスなど。

日陰がよいもの、アナナス、シユロチク、君子ラン、アジアンタム、カラジューム、ポトス、セントポーリヤ、レックスベコニア、シャコバサボテンなど。

灌水

少い水やりはすぐ蒸発し、根焼けを起こし、害にこそなれ得にはなりません。たっぷりやることで、鉢のなかの炭酸ガスを下に押し出し、新鮮な空気を水とともに入れこみます。

（三川指導部＝田上勇・記）

小さな松竹梅の盆栽。正しく手入れされれば、うつてかわつて美しくなるのだが……。